南部氏中心居館の室内空間

布施　和洋
（南部町教育委員会
社会教育課史跡対策室
総括主査）

現在、南部町では国立科学博物館と共同で、戦国大名三戸南部氏の中心居館である聖寿寺館跡（しょうじゅじたてあと）から出土した様々な遺物を調査し、分析を行っている。顕微鏡観察や蛍光X線分析により、座敷に設えられた襖の引手金具に金鍍金（きんめっき）が施されていたことが明らかとなり、謎に包まれた居館内部空間の具体像が浮かび上がってきた。

室町・戦国期の引手金具は全国の城館等で十数点ほど出土しているが、その色は基本的に黒である。聖寿寺館跡出土の金鍍金引手金具は国内でも珍しく、北畠氏館跡（三重県）、長曾我部（ちょうそかべ）氏の岡豊城跡（高知県）に次ぎ、国内3例目の確認となる。

残念ながら、聖寿寺館は1539（天文8）年の火災により焼失したと伝えられており、当然、襖自体は残っておらず、実際にどのようなデザインの襖が設えられていたのかは不明である。

しかし、襖の引手金具が金色であったということは、襖絵の画題が、白地に黒の水墨画ではなく、金地を交えた色鮮やかな彩色画であった可能性が高いと推定される。また、室内を彩る建具として、柱と長押（なげし）の結節点に施される六葉の釘隠（くぎかくし）や樽口金具（たるくちかなぐ）も確認された。

さらに、目を引いたのが室内の調度品である。金鍍金された屏風の押縁（おしぶち）や掛軸の金具、座敷飾りのための銅製の香炉や燭台なども相次いで確認された。屏風の縁金具が金色であったということは、襖と同様に金地の屏風であった可能性が高い。

すでに、聖寿寺館跡では稀少性が高い飛青磁（とびせいじ）や瑠璃釉水注（るりゆうすいちゅう）など、様々な種類の高級陶磁器が確認されていたが、それに加えて掛軸や金地の屏風、香炉などで座敷飾りが施された彩色画の襖のある部屋が想定できるようになった。

図は『慕帰絵詞（ぼかえことば）』という西本願寺3世覚如上人（かくにょしょうにん）の伝記を記した絵巻物で、1482（文明14）年に補作された絵は聖寿寺館の最盛期と時期的に重なるため、当時の上流階級の室内空間を類推する上で参考となる。出土遺物の分析により、実際に聖寿寺館跡にもこのような都ぶりな空間が広がっていた可能性が高いと考えられるようになり、南部氏の生活イメージが一新された結果となった。

聖寿寺館跡からは金・銀・銅・真鍮などを熔かした坩堝（るつぼ）が確認されており、居館内部で多様な金工品生産が行われていたことが想定される。当時、南部氏は都から最も離れた遠国の大名であったが、調査・分析で確認されたのは都直通の文化であり、貪欲に中央の情報や技術を取り入れていたことが伺われる。

『慕帰絵詞』（西本願寺所蔵）と聖寿寺館跡出土の建具・調度品